

# 幼児期から青年期にかけて衣服を選び、 着る行為の変容

——女子大学生を対象としたインタビュー調査から——

木戸彩恵<sup>1)</sup>・荒川 歩<sup>2)</sup>・鈴木公啓<sup>3)</sup>・矢澤美香子<sup>4)</sup>

(立命館大学立命館グローバル・イノベーション研究機構<sup>1)</sup>・武蔵野美術大学教養文化研究室<sup>2)</sup>・  
東京未来大学こども心理学部<sup>3)</sup>・武蔵野大学通信教育部人間科学部<sup>4)</sup>)

本研究は、発達における衣服の取り込みとその意味づけについて、女子大学生へのインタビュー調査から発達の経緯とその変遷について文化心理学の観点から検討することを目的として行われた。研究参加者は女子大学生10名とし、幼児期から青年期にかけての着衣の変遷についての語りを得た。インタビューで得られた語りは、衣服を着る人とその人を取り巻く社会・文化的状況の全体像を把握すべく、着衣の創造、継承、改変について分析した。考察では、着衣に対する価値観の変遷といくつかの発達理論を結び付けて捉えることで、身体性・社会性・ファッション性が一体となり、個人を組織化するためのファッションとしての着衣が形成される思春期までの女子の発達が明らかになることについて論じた。最後に日常的な経験のダイナミズムと社会的構造という観点から、着衣の質的変換のきっかけとなる時期に個人がどのような経験をしているか、そして、その経験をいかに組織化しているかについて議論を行った。

キーワード：被服心理学，文化心理学，半構造化インタビュー  
立命館人間科学研究，No.32，85-103，2015.

## はじめに

何かを身にまとう行為だけ、あるいは衣服そのものの実用品としての機能だけに着目すると、赤ん坊から老人（そして死者）までみな同じことをしているように見える。だが、同じように身にまとっているからといって、老人の衣服と子どもの衣服は同じ意味合いで着られていると言えるだろうか。近年では、衣服の実用的機能だけではなく、他者との相互作用や自己を変化させる機能が強調されている（菅原 + cocoros 研究会 2010）。しかし、生まれたばかりの子

もが、このような対他的機能、対自的機能を理解して衣服を選んでいるわけではない。また、衣服そのものに、そのような性質が潜んでいるわけでもない。衣服の対他的機能・対自的機能は、「自然にいつのまにか」人々の生活に根深く取り込まれ、あるいは人々のほうが巻き込まれていくと考えられる。では、どのようにして、人は、衣服を自ら選択して着用するという行為を身につけていくのだろうか。ここでは価値づけの観点から衣服を着るという行為について検討をおこないたい。そのために、インタビュー調査における語りのなかに立ち現れてくる価値観に着目し、分析をおこなう。なお、本論ではよそお

いに関する行動全般を能動的な人の行為として扱うため、「衣服を「着」という意味の着衣と呼び、女子学生の着衣の価値観の発達の変容を明らかにする。

## 1. 問題

衣服は私たちにとっての「第二の皮膚（セカンド・スキン）」である（Drake & Ford 1979）。衣服と人の関係を探る心理学の領域の1つに被服心理学がある。被服心理学は、おもに外から見える衣服が着用者の心理に及ぼす効果・影響について研究する分野である（佐藤他 2009）。

被服心理学は社会心理学領域や社会学の立場において展開され、個人特性との相関関係を検討した調査研究や実験による印象形成の研究がなされてきた。他方、より社会学的な観点を取り入れた研究の文脈では、「化粧」「流行」といった大きなテーマをマクロな視点からとらえる記述的調査や、「保護」（温度変化や外的刺激から体を守る）、「慎み深さ」（身体が発する信号（性的信号など）を抑制）、「ディスプレイ」（社会的地位、社会的背景、場面職業、役割を示す）など文化的な共通性に注目したよそおいの意味が検討されてきた（Morris 1977; 1991 など）。本稿であつかうよそおいの取り込みに関して、流行とメディアの接触との関連から、ファッション・ヘアスタイルといった一般的な流行では雑誌メディアの影響が最大であるという結果を導き出した中島（1998）はこの研究の例といえる。

先行研究において着衣を捉える場合、着衣に関する個別の「要因」や「要因のうちどれがどのくらい着衣に影響」するかについての検討はなされてきた。これらの研究が一定の成果をあげる一方、高木修（2010）をはじめ、多くの研究者が、衣服は、「外見」が観察される社会的文脈、あるいは一層大きな文化的、歴史的な文脈と切り離して考えることはできないという指摘を

繰り返してきた。しかし、実際には着衣に関する事象が、社会的文脈、あるいは一層大きな文化的、歴史的な文脈のなかに具体的な相互作用を生み出し「よそおい」を行うシステムを構成していくかについての検討はまだ十分なされていない。

そのため、本研究では発達心理学の潮流をくむ文化心理学の立場から服を着る人とその人を取り巻く状況と価値観という包括的な観点から、人々が「よそおい」の文脈として衣服を選び、着る行為の意味の変遷を明らかにする。文化心理学とは高次の精神機能に関心を向ける研究を志向し、人の意志、意味の意図的な構築を扱う心理学の領域のことである（Valsiner 2014）。つまり、ここでは文化心理学を採用することで、着衣という文化を衣服という記号が媒介すると考え、そこに付与される価値観を検討する。記号と媒介の関係は、ヴィゴツキーの高次の精神機能発達理論に由来する。これは、媒介には象徴的なものだけではなく物理的なものも含まれ、それが人の精神的・物理的な活動を組織し、継続させることができるとする考え方である（Stone & Wertsch 1984）。すなわち、従来個人内のプロセスとして考えられがちであったあるスタイルの着衣を行うようになるプロセスは、実は社会的な事態であり学習である。本研究では当事者とさまざまな人工物の相互作用としてこの過程を扱うことで、衣文化を捉えていく。

衣服が社会生活を円滑に営む上での重要な社会的道具（柏尾・箱井 2006）とするならば、——よそおいが文化における価値や秩序を媒介する人工物によって構成されるものであり、文化の成員に共有・実践されることによって構成されているものとするならば——よそおいが、人々の実践の中で協働的に創造され、継承され、さらに改変されていくその状況を捉える必要がある（茂呂他 2012）。よそおいのように複数の要素や要因が複雑に交錯する現象の理解に

は、社会・文化的文脈における個人と社会・文化の相互作用や発達の時間的経緯といった多様性やダイナミズムを捉えようとするホリスティックな観点からのアプローチが適している。それは、社会や文化が人の様々な活動や生産物に対する優先順位を決定するからである（Solomon & Rabolt 2008）。本研究におけるアプローチは、よそおいを先験的な実体として捉えるのではなく、自己と状況の交渉の結果として産出されるものとして捉える必要性を示唆するものとして位置づけられる（有元 2001）。

本研究では、文化としての衣服の取り込みについて議論をするために、価値観の前景化を扱う。発達の経緯の中での着衣の取り込みを価値観のレベルから捉えることで、服を選び、着るという行為における価値づけの変遷のダイナミズムを把握することができると予測される。そのため、クリークモア（Creekmore 1966）の被服に対する価値観の8つのタイプ（表1）に基づきながら議論をすすめる。クリークモアの指標を採用した理由は、価値指標が観測定目録として確立されている指標であり、被服心理学

の分野において広く研究に適用されているためである。

本研究では、インタビュー調査を通してその時その場所に生きる人々によってつくられる社会構成的な現実（衣服の取り込みとその意味づけ）を捉える。このようなアプローチをとることで、従来の研究との共通した知見とともに、着衣の新たな側面が明らかにできると考えられる。

## II. 目的

本研究の目的は、女子大学生にインタビュー調査を行い、発達のプロセスと着衣に対する意味づけの変遷がどのようにに関連しているかを明らかにすることにある。その際、なるべく生活的にも経済的にも自立しておらず、個人個人が身を置く環境による差が大きくならない時期である幼児期から青年期にかけての着衣の変遷に着目し、衣服を着る人とその人を取り巻く社会・文化的状況の中での着衣の意味の創造、継承、改変について考察する。なお、研究対象時期を幼児期から青年期に限定したのは、経済的状況

表1 被服に対する価値観の8つのタイプ（Creekmore 1966）

①芸術的	被服について美を願望し、美を尊重し、美に関心を抱き、追求する。
②経済的	被服の使用と選択について時間を、エネルギーを、そして金をかけることを好まない。儉約・質素・実用・耐久などを重視する。
③探求的	被服を実験上の原材料として商品的に評価しようとする。変化・冒険・自由を重視する。
④政治的	被服を威厳、差別、リーダーシップのしるしとして使おうとする。権力・地位・名誉を重視する。
⑤宗教的	被服を象徴として精神的、道徳的な表現を強調する。
⑥感覚的	被服に対して暖かさ、涼しさ、滑らかさ、ぴったり身体に合うか、ゆったりしているかなどの快適性を願望する。安全・保護・清潔・着心地などを重視する。
⑦社会的	着ている被服について他人がどう思っているかと他人に対して関心を抱く。他者の被服に対する関心と同調するよう心がける。
⑧理論的	被服がなぜ使われるのか、被服はなぜ必要なのか、被服はなぜ満足を与えてくれるのかという理由を知識として明らかにし、体系化したいと願望する。

が研究参加者自身でコントロールできない時期に、どのように親や友人と交渉<sup>1)</sup>を行うかを明らかにしたかったためである(本稿では、家庭の経済的な状況は問わないこととした)。さらに、研究参加者を女子大学生に限定したのは、第1に男性よりも女性の衣服の選択肢が多く一般的に衣服に対する関心が高いためより多くの語りを得ることができること、第2に、インタビューが女性研究者であり、研究を実施する上での経験的な知識から女性を対象とした方がより円滑にインタビュー調査を実施できるという理由からである。

### Ⅲ. 方法

#### 1. 方法

研究参加者：大学生(女性)10名(19から22歳：平均年齢20.3歳)

インタビュー手法：インタビューに際しては、半構造化インタビュー法を採用した。

インタビュー時間：53分から75分(平均時間62分)

研究手続き：大学における授業内で着衣の選択を発達心理学的に研究するためのインタビュー調査として研究参加者を募った。インタビューは、研究参加者の自発的な発話の程度に応じつつ、個別に1度ずつ実施した。インタビューは、女性研究者2人を中心に実施した。インタビュー項目は、①着衣の変遷について(着衣の変遷を、幼稚園・小学校・中学校など時期に分けて語って頂く)、②変遷のきっかけについて、③選ばなかった衣服のジャンルやファッションについて、④身体的な制約についての4つの項目であった。研究参加者からは、十分なインフォームド・コンセントを得たこととプライバシーに配

慮して論文化することに承諾をとり、研究協力のための謝金として1人につき2000円を支払った。

分析方法：インタビュー内容は事前に同意を得たうえで、ICレコーダーに記録した。分析は、得られたインタビューデータをトランスクリプト化するところから始められ、補助資料として調査者自身がメモをとった記録が用いられた。分析の際には作成したトランスクリプトを1次資料とした。そして、調査者と研究参加者の対話を切片化し、対話のまとまりごとにカード化したものを2次資料とした。

インタビューの全体の語りの中で、大学生活における衣服との関わりも語られたが、分析では幼児期から青年期(高校卒業)までの期間に限定した。これは、第1に、研究参加者の実質的な衣服選択と着衣のスタイルが大学生活のなかでも持続していると判断されたこと、第2に、大学入学による生活形態の変化にともない経済的環境の変容が起こっていることという2つの理由によるものである。特に、第2の理由は全体としての現象を捉えにくいものとしていたため、大学入学以降のデータは扱わないこととした。なお、研究参加者の経済状況についてはインタビュー中に直接問わないよう配慮した。

分析では、質問項目「①ファッションの変遷について」を軸として2次資料を時間的順序に沿って並べ替えた上で、先述したクリークモアの8つの価値観のタイプに分類した。なお、実際の分析において研究参加者の語りに現れていた価値観のタイプは、②経済的、③探求的、④政治的、⑥感覚的、⑦社会的側面の5つのタイプであったため、上記5タイプに限定して議論をおこなう。なお、カード化したデータの一部を必要に応じて各時期の特徴を説明するための引用として使用した。

最後に、分析結果の正確性を担保するための検証作業として、分析完了後に研究対象者と同じ属性をもつ新たな対象1名に分析結果を提示

1) 幼少期から青年期にかけては、衣服の選択・購入・着用の際に他者からの承認がある程度必要となる場合がある。個人が承認を求め、認められるあるいは却下される過程を交渉と表現した。



し、結果の妥当性を確認した。この手続きは、分析が母集団内部において異なる対象であった場合にも共有できるか否か確認し、結果の正当性を保証するために実施したものである。

## 2. 結果

インタビューの分析結果は、幼稚園から小学校・小学校から中学校・中学校から高校の3つの時期区分にわけて提示する。よそおいは認知的な発達だけではなく、社会文化的要素が強く影響すると考えられる。ただし、時代性、地域性や集団性によっても人の着衣の様式は異なる。研究参加者においても、微細なずれがあったため、必要に応じて異なる時の語りと判断されたデータも用いて結果を提示する。以下では、初めに各時期区分の特徴をまとめ、次いで各時期に前景化された価値観のタイプ毎に、具体的なエピソードを交えて幼児期から青年期までの衣服に対する価値観の変遷を論じる。

### (1) 与えられ・着せられる対象としての衣服（幼児期から小学校）

幼児期から小学校にかけては、図1に示したように経済・探求・感覚の3つの価値が前景化する。この時期の衣服を「与えられ・着せられる対象としての衣服」と名付けた。衣服ははじめ主体的に着るものではなく、養育者などによって客体として「着せられる」とものとして経験される。経済については、親の経済的状況から

の影響が強く、こちらも受け身的な語りがなされる。感覚が前景化するの、この時期のみであり、着心地や機能性などに関する言及がなされていた。そして、探求としてアニミズム的価値観に基づき、何者かに擬態するための手段としての衣服に関するエピソードが語られていた。政治・社会が前景化されていないのもこの時期のみである。これは、衣服を着る時の価値がより自己に向いていること、主体的に衣服を着用するという意識が働いていないことを意味していると考えられた。

### ①「経済」：子どもが着せられる衣服をめぐる社会的パワー

「経済」について、子どもが着せられる衣服は、家族の事情や財政状況により規定される。研究参加者からは、自分でアクセサリを作っていたというエピソードや、着なくなった服を「お下がり」する家庭環境で育ったというエピソードが得られている。こうしたエピソードを、子どもが経験する「着せられる衣服をめぐる社会的パワー」としてまとめた。ちなみに、参加者4は既製品の服の色やデザインではなく、母親に作ってもらった服が好きだったというエピソードを語っていた。「お下がり」では、自分のモノという感覚にはなりにくいため、敢えてそのように語っていたのかもしれない（引用1:「お母さんの手作りのが好き」）。

経済	①子どもが着せられる衣服をめぐる社会的パワー
探求	④何かになるものとしての衣服
政治	
感覚	②衣服に対する違和感と受容 ③衣服に対する違和感解消への動き
社会	

図1. 与えられ・着せられる対象としての衣服（幼児期から小学校）

## 引用 1

引用	語り
引用1	<p>お母さんの 手作りのが 好き</p> <p>参加者4: 田舎から、要らなくなった古着とか。お母さんのお姉ちゃんの子供とかが着てたやつを。要らなくなったやつがあって。それがこっちに回ってきて、(うちの)お姉ちゃんも親戚のお下がりを着て。あたしも、お姉ちゃんのお下がりがイコール親戚のお下がりを着て。服を買ってもらうのは、ピアノの発表会の時のよそ行き服とかだけで。後はほんとに古着です。(一部略)</p> <p>調査者: お下がりやっただけでも。気に入ってた服とかってあった? 参加者4: 気に入ってた服か。ああ。あの、お下がり以外で。お下がりはなんかあんまり好きじゃなかったんですけど。お母さんが、私、片親なんですけど。離婚して。お母さんが、お金ないときに手作りで服作ってくれて。そこから辺の売ってる手作り服の本とか買ってきて。それ見ながらちくちくお針子してくれて。スカートとか簡単な、簡単じゃないですか。作るの結構。だから、それとかはかかしてもらってたんですけど。手作りのやつは。結構気に入ってましたね。</p>

## ②「感覚」：衣服に対する違和感と受容

養育者が用意した衣服を積極的に受け入れる場合と、自ら判断することなく受け入れる場合がある。また、例え違和感がある場合でも与えられた衣服を「そういうものだ」というあきらめをもって着ている場合もある(引用2:「好みじゃなくても着せられていた」)。

しかし、やがてお気に入りの衣服や好みの衣

服ができてくると、本当は別の衣服が着たいという気持ちや、人によっては女の子らしい衣服が恥ずかしいと感じるようになり、最終的にはクローゼットの中から衣服を自分で選ぶようになる。こうした過程を「衣服に対する違和感と受容の過程」として特徴づけることができる。

衣服を自分で選ぶようになる過程には、2つのパターンがある。第1のパターンは養育者が

## 引用 2 から 5

引用	語り
引用2	<p>好みじゃなくても着せられていた</p> <p>調査者: どんない感じの服が多かったかな? 参加者8: うーんとキャラクター。トレーナーはキャラクターもので、ワンピースもキャラクターものかな。パンダ柄みたいな。(一部略)</p> <p>調査者: 母さんが好んで、そういうのを着せてらっしゃった感じですか? 参加者8: 確か。でも、どうなんだろう。親が買ってきたのを見て、これどう? って言って、可愛いねって言って着てたって、本人は言っていました。確か。 調査者: お母さんが、じゃ、最初は買いに行つて、好みかどうかを聞きたいな? 参加者8: 好みじゃなくても多分着せられてたんだと思うんですけど。</p>
引用3	<p>フェミニンなのは恥ずかしい</p> <p>調査者: 幼稚園のときってどんな服着てた? 参加者2: 幼稚園の時は。親が基本的に大体買ってきちゃうじゃないですか。やっぱり、ちっちゃいから。ずっと、幼稚園は、すべて親だったんですけど。私は、女の子らしい服、好きじゃなかったんですけど。でも、親が割とフェミニンなものを買ってくるから、たまに恥ずかしかったという。ま、着てました。 調査者: うーん。フェミニンな感じて、どんな服装やった? 参加者2: 私的には。そんなプリプリはしてないけど。ちょっと、パールついてたりとか。ちょっとだけ、フリってなつてたりとか。っていう感じです。</p>
引用4	<p>母が選んだ衣服のなかのお気に入り</p> <p>参加者10: 幼稚園のときは、親が買ってきたものを着てる、という感じで。私の場合は、一回気に入るとそれしか着なかったの、結構、洗ったら着てみたいな感じてした。 調査者: なるほど。主にお母さんに進めてもらったもので、色とかブランドとかありますか? 参加者10: 一応、親的にはコムサ・デ・モードを買ってくれたみたいなんですけど、私はあんまりそういうのより、スポーツ的なアディダスとかの方が、好きでした。(一部略)</p> <p>調査者: お母さんが選んでくれたなかから自分の好きなものっていうのがあったんですね? それほどんな系統とかってありました? 参加者10: うーん...スカートよりはズボン派の感じで...男友達たちと遊ぶ、っていうか周りに男の子が多かったんで、紛れてズボン系な感じの服装でした。</p>
引用5	<p>バリエーションだけでフリフリは充分</p> <p>調査者: 幼稚園の時にこだわってたこととか、ある? 自分で服着るときとかに。 参加者1: 着るときに? とにかく、フリフリが嫌だったんで。あまりディテールのないものを着てました。 調査者: へえ。着せられたら嫌がってたとか? 参加者1: バリエーションだけでフリフリは充分かなみたいな感じだったんで。(一部略)</p> <p>参加者1: 衣装っぽく見えちゃうのが嫌だったんで。フリフリとか着て。木登りとかして遊ぶ子だったんで。あんまりフリフリしてると、汚したら(いけない)みたいな。</p>

子どもに対して自分で選択するよう求めるパターンであり、第2のパターンは子どもが親が出しておいた衣服を嫌がったり、自分で衣服を勝手に出してきたりするというより自発的なパターンである（引用3：「フェミニンなのは恥ずかしい」、引用4：「母が選んだ衣服のなかのお気に入り」）。

幼少期の着衣の好みには、特に色と機能性が関係するようである。例えば、色に関して参加者4は、「明るいピンクとかそういうのも着てみたかったし。スカイブルーみたいな水色とかも着てみたかった」と語っていた。ピンクやスカイブルーはいずれも女兒に人気の色であり、ここにジェンダーの形成過程を垣間みることができる。それと同時に、機能に関連して、着衣は遊びという活動とも関連する。引用5は、女兒の遊びと衣服の機能性のズレの典型的な語りだと捉えられる（引用5：「バレエだけでフリフリは充分」）。

### ③衣服に対する違和感解消への動き

衣服に対する好みや、親から着させられるものとの違和感が強くなり、手持ちの服から選ぶだけでは対応しきれなくなると、養育者との交渉の末に自分自身の望む衣服を購入してもらうようになる人もいた（引用6：「一度だけ着たい服を買ってもらう」、引用7：「同じ服の子とかぶるのが嫌」）。これを、「衣服に対する違和感解消への動き」と呼ぶ。

### ④「探求」：何かになるものとしての衣服

幼い頃には、服が変身願望を充足させるための機能を持つこともあるようである。例えば、参加者8はハロウィンに母親が準備していたきれいなコスチュームではなく、「タヌキ」になることを選んでいる（引用8）。参加者7は日常生活において「キュウリ」になりたがり、養育者の制止をふりきって上下緑色の服を着て「キュウリっぽくて良いじゃんって言った。」というエピソードを語っていた。このように子どもにとって、服はアニミズム的な遊びシステムの機能を

引用6から7

引用	語り
引用6 一度だけ着たい服を買ってもらう	<p>調査者：「こんなん着たいねんけど」みたいな感じのことを言った？とかはあった？                  参加者4：ちょっと1回だけあって。1回だけ。その意見が通ったことがあって。ピンク色のワンピースが欲しかったんですよ。花柄の。普段だったら買ってもらえないん…ですけど、絶対に。おばあちゃんがその時いて。その時おばあちゃんがたまには、子供が着たい服を買ってあげなさいみたいな感じで。その時1着だけ買ったっていうのを、今思い出しました。                  （一部略）</p> <p>調査者：欲しかったっていうのは、一緒に買い物をしに行った時に見て、「これ」みたいな感じ？                  参加者4：かわいいなと思って。多分、何回も物欲しそうに見てたんだと思うんですよね。あんまり「欲しい、欲しい」とは言わなかったんですけど。ただ、「なんかじーっと見てるな」みたいな感じで。何となく察したんでしょうね。おばあちゃんが。</p>
引用7 同じ服の子とかぶるのが嫌	<p>参加者3：お母さんが、ヨーカドーが近くにあったんですけど。ヨーカドーでばかり買ってくるから。同じクラスの子とかぶっちゃうのがよくあって、「それ、あたしも持ってる」みたいな。それがすごい嫌だったからお母さんに「もっと違うとこで買ってよ」みたいな感じで。言ってた。記憶があります。                  調査者：実際違うところで買った？                  （一部略）</p> <p>参加者3：mezzo pianoとか。そういうのを買ってもらってました。                  参加者3：で、なんか、あんまり。同じクラスの子と。かぶらないようにみたいな感じで。昔、子供が読む雑誌みたいのあったんですけど、『nicola』とかそんな名前の。それ読んで。「この子みたいになりたい」みたいな。感じでしたな。                  （一部略）</p> <p>調査者：（雑誌の）どういところが好きやった？っていうか、どういところが憧れた？                  参加者3：やっぱ、なんかカラフルでかわいい感じの。ちょっと他の子と差つけようみたいな。なんか、そういうのが可愛かった。                  調査者：へえ。そういうふうな、似せるようにするためにやったことって何か、髪形とか、あった？                  参加者3：あ、髪伸ばしたり。あとアクセサリーとか見て、自分じゃお金なくて買えないから。似、似てるのを作ったり。</p>



引用 8

引用	語り
引用8 タヌキ	参加者8:ハロウィンとかのコスプレする時に、魔法の格好させよう、魔法の格好させるようにー、何かちゃんとドレスとかを親が用意してたのに、「うん、タヌキ、タヌキ」。タヌキとしか言わなくて、しょうがなく手綱でマフラー、マフラーじゃなくて帽子編んでタヌキの耳付けて、何か化粧でバババってお鼻やって、タヌ、茶色いパーカー着てタヌキ。翌年もタヌキとしか言わなかったって言っていました。 調査者 : どうして？ 参加者8: わっかんないです。多分、弟がタヌキだったんですよ。いつも。

はたしている。そのため、こうしたシステムを「何かになるものとしての衣服」と特徴づけた。探求は、中学校から高校においても前景化するが、そこでの探求は、制服という制約があるなかでの自分らしさの表現の探求であり、変身願望の充足という意味での探求とは質が異なる。

(2) われわれ意識を支える衣服 (小学校から中学校)

小学校から中学校にかけては、社会・政治・経済的価値が前景化する。特に「経済」面においては、次第に（経済的にはまだ自立していないため、実際には養育者が主に衣服購入の担い手であるものの）自立的な衣服選択へと向かう様子が伺える。また、社会的価値においては、学校集団の規範が強く認識されており、学校集団の内的な規範のなかで、試行錯誤しながら衣服選択をしている様子が伺える。ここでは、社会・政治・経済の順に、エピソードを記述していく。

①「社会」：集団規範に基づく衣服選択

子どもにとって、学校という集団との出会いは、家族以外の集団における潜在的な規範に従うこととつながる。引用9では、小学校で集団の規範から外れず、かつ目立たないことが、衣

服選択において重要であるという事実が語られている。こうした集団的な規範に沿った衣服を選択するのは早い場合には、幼稚園のころからそうした傾向があると語っていた参加者もいた。また、参加者4は「中学校に制服で目立ってというのが嫌だった。」と語っていた。こうした語りは、集団という社会システムにおける友人関係の形成と衣服選択に関して集団から浮かないようにするという知見（高木麻未 2010 など）と一致する（引用9：「小学校で浮かない感じにしたいけど、ダサいのもイヤ」）。これらを、「集団規範に基づく衣服選択」とした。

②おしゃれをする他者との出会い

小学校から中学校にかけて社会性が広がるこの時期は、新たな出会いを経験する時期でもある。その中で、おしゃれをする他者と出会うこともある。同時に、ティーンエイジャーに差し掛かる年齢となりファッション雑誌も新たな情報源になる。引用10では、参加者が周りの子の変化を知覚したエピソードが語られている。友達集団の中での流行について、参加者9は「服やデザインがどうこうっていうよりは、好きなブランドだったらもういいみたいな感じ」と述べ、ブランドの価値観を取り込んでいたと語っ

経済	⑦養育者同伴の衣服選択		⑧自立的な衣服選択への動き	
探求				
政治			⑤優等感としての衣服	⑥身体という拘束と衣服選択
感覚				
社会	①集団規範と衣服選択	②おしゃれをする他者との出会い	③遊びとしての衣服	④失敗による最低ラインの調整

図 2. われわれ意識を支える衣服 (小学校から中学校)



引用 9

引用	語り
引用 9 小学校で浮かない感じにしたいけど、ダサイのもイヤ	<p>調査者：(お母さんが買ってくる服に対して)「えーっ」とか。「これならいいやろ」っていう時の違いつて、どんなところやった？</p> <p>参加者3:基準は。何だろ。あんま派手な色じゃないとか。そんなところですかね。あんまり突っ込みどころのない服のほうがよくて。やっぱり小学校って閉じてるじゃないですか。だから、あんまり、なんだろう、変に浮かない感じにしたいなどは思って。だから、そんなに奇抜なものは絶対に選ばなかったです、自分から。</p> <p>(一部略)</p> <p>参加者3:でもなんか、ダサイのは嫌だったから。そこは地味だけど、ただの地味は嫌だった。</p> <p>調査者：どんな？難しいな。</p> <p>参加者3:なんだろうな。地味な感じのグループの子が着てる服とは。また違う。だけどみたくない。あ、当時流行ったものとか、あるじゃないですか。例えば、3本線のズボンとかが流行った時はちゃんとそういう、流行るものは一応着てた気がする。</p>

引用 10 から 12

引用	語り
引用 10 手紙交換組の子が1500円のピンをつけてオシャレする	<p>調査者：流行とかっていうのが分かってきたのって、このくらいの年齢(小学校5年生くらい)から？</p> <p>参加者1:そのころですね。周りがいきなり。色々着始めたのって、びっくりしたっていうのもあるんですけど。そのころ。</p> <p>調査者：どういこと？</p> <p>参加者1:おしゃれし始めたなっていうのを感じて。まあ、そのころになるとあれですよ。走り回ると。走り回らない子と、やっぱ分かれちゃうから。っていうのもあると思うんですけど。走り回らない組とかが。毎日、手紙交換とかしてるような女の子グループとかが。みんな、ちょっとおしゃれになってきて。うん。</p> <p>調査者：へえ。どんなものを取り入れてたとか覚えてる？</p> <p>参加者1:髪に、かわいいのをつけてりとか。ピンとか、流行って。1個1,500円とかするピンとか、つけてる子とかいて。</p> <p>(一部略)</p> <p>調査者：何でわかったの？</p> <p>参加者1:だって、そのピンの話題になるじゃないですか。「これ、すごい高いねんよ」みたいな感じで言われて。「えーっ」みたいな。その話題になったときに、「メゾピアノかあ」って言って。「これもメゾピアノ、これもメゾピアノ」みたいな感じだったんで、その子が。その子が揃えてたんですよ。それで、「えーっ」って言って。</p> <p>調査者：それ聞いてさ、欲しくなったりとかした？</p> <p>参加者1:いや、私、そういうの好きじゃなかったんで。</p>
引用 11 親の影響で小学生で派手な服はちょっと違うと思う	<p>参加者1:あんまり、派手な格好とかって。好ましくないって思ってたんですよ。</p> <p>調査者：なんで？</p> <p>参加者1:親が。どっちも学校の先生なんで。小4、5、6とかの女の子とかが。この辺ちょっとあけてフリフリとか着ると、ちょっとねみたくないの。やっぱ空気としてあるし、派手にしちゃいけないみたいな気持ちは結構ずっとありましたね。別にフリフリ着たかったわけじゃないんですけど。そういうの着てる子たちとすごい壁を感じてたっていうか。ちょっと違うよなみたくない。</p>
引用 12 雑誌の中の一部を真似る	<p>調査者：(雑誌には)情報が載ってるやん。どこら辺まで実践してた？</p> <p>(一部略)</p> <p>参加者3:ランドセルにかわいいマスコット付けようみたいな。載ってて、そういうのとか、あとは筆箱とか、超いっぱい種類があって。「こういうのが今、イチ押し」みたいなとか。洋服は、でも、モデルの子が着てるのを上から下までとかは、やっぱ…無理なので、スカートだけとか。お誕生日とか。特別な時にコートとかを買ってもらうみたいな。</p>

ていた（引用 10：手紙交換組の子が 1500 円のピンをつけてオシャレする）。

子どもたちが社会的な価値観を取り込むかどうかは、養育者の教育の影響が影響することもある（引用 11：「親の影響で小学校で派手な服はちょっと違うと思う」）。また、参加する活動によっても異なる。外で遊ぶ活動／集団に参加するか、雑誌を読み、可愛い衣服を着て見せ合う活動／集団に参加するかによる。後者を選択した場合に参加者 3 は、「『これ、どこどこで買っ

たんだ』とか。雑誌とか見て、『何々ちゃん、かわいいよね』って言って。そういう雑誌があるって存在を知って。自分もみたくない。」というようになったというエピソードを語っていた（引用 12：雑誌の中の一部を真似る）。ただし、この時期は予算として使えるお金が限られているので、欲しい物や必要なものをそれぞれに工夫して取り込むことが必要となる。

## ③遊びとしてのファッション

衣服をモノとして手に入れた、または身につけた結果ではなく、その過程を他者と共有する楽しみが、ファッションとしての衣服の価値を高めることがある。衣服の選択ではないが、参加者2はネイルを塗るという未知の体験や化粧が遊びとして機能していたと語っていた。参加者8は、一緒に買い物にいくという行為が遊びとみなされることに戸惑いを感じたエピソードを次のように語っていた(引用13:「服を買うのが遊びだと知る」)。

遊びとしてのファッションの取り込みは特に、量販店や古着屋など、少ない予算でやりくりしながら楽しむ選択肢が増えることで拡大する。遊びとしてのよそおいの価値は、後に他に優先すべき価値が出てきたとき、前景化しなくなるが、たとえ遊びとしてのファッションが機能し

なくなっても他者との関係の構築や、適切な代替的衣服への切り替えが困難な場合には「引き返せなさ」が本人の衣服の選択を制約することもある(引用14:「活動の優先順位が変わる」、引用15:「いまさら引き返せない」)。

## ④失敗による最低ラインの調整

遊びや優等感で衣類を探索するのは、ファッションをゲームとして楽しむ価値観に基づく。研究参加者は、ファッションという名のゲームに積極的に参加し、その世界を探索に値するモノだと感じ、探索することで自己効力感を得ているのである。他方で、所属する(したいと思っている)集団からの拒絶や批判(をされないこと)が着衣の選択の動機になることがある。引用16として、衣服の選択に失敗することで、衣服について嫌が応でも関心を向けざるを得なくなる

## 引用 13 から 15

引用	語り
引用 13 服を買うのが遊びだと知る	<p>調査者 : 友達の間で流行ってた服とか、そういうのとかって(引越した先でも)同じような感じだったんですか？</p> <p>参加者8: あ、全然違いましたよ。もうちょっと、皆、もっとおしゃれで、こういう服持っていないなあとか思いながら一。でも、どこで買うんだらうみたいな。買う場所を知らなかった。</p> <p>(一部略)</p> <p>参加者8: 外でずっと遊んでたんで、ドッジボールとかして。全然買い物とかも、スーパー以外行かなかったんで一。どこで何を売ってるか知らなかったです。</p> <p>(一部略)</p> <p>調査者 : A県では買い物行くのは遊びじゃなかったの？</p> <p>参加者8: あ、遊びじゃないっていうか、遊びに行けるような距離になかったんですよ。</p> <p>調査者 : じゃ、遊びが全然違うかった？</p> <p>参加者8: 全然違いましたね。本当に駆けずり回ってるみたいな。</p> <p>調査者 : へー。じゃ、小6の時に帰ってきてちよっとびっくり？</p> <p>参加者8: びっくり、しましたね。なんか、遊びにこーっつって、いいよって行って、サッカーボールとか用意して行ったら、違うらしい。あー、皆、ポカンってしてるよとか。</p> <p>調査者 : じゃあ、みんな行ったらオシャレしてきて？</p> <p>参加者8: そう。何か、「財布はもってないの?」「財布? お金をもち歩くの? 何で? 何に使うの?」って。</p> <p>調査者 : へー。それで一緒にお買い物とかは行ったりして？</p> <p>参加者8: でも、じゃ、お金持っていないなら持っていないでまあ付き合えよってみたいな感じで。私たち見てるから、お前が見てる分にはいいだろうみたいな。一緒についていだけ。</p>
引用 14 活動の優先順位が変わる	<p>参加者2: おしゃれな人がひたすら集まってきたから。その影響で、着る服も変わってきた。っていう感じですよ。</p> <p>調査者 : そのころは？</p> <p>参加者2: その時に。もう服はやめようみたいな。美術以外のことにかける時間が大き過ぎるから。そういう、例えば、服見たりとか。自分が楽しいって思ってることを全部やめようと思って、服も全然買わなくなつて。とにかく何にもしなかったです、服とかに関しては。</p> <p>調査者 : 外見をあんまり気にし……。</p> <p>参加者2: 全然。もう、そういうの、もう、封印みたいな。</p>
引用 15 いまさら引き返せない	<p>参加者6: そのお友達一は、高校でちよっと家が遠かったんで、転校してしまって、いなくなっちゃったんですけど、当時その子に影響されて他の友達もすごい、そのファッションが伝染…したんですけど、もう結局散り散りになったりとかやってるうちに、ファッションが、何ていうかな流行りに戻っていったら、最終的にその自分の高校でそういうファッションをしていたのが自分だけになっちゃったって感じでしたね。</p> <p>調査者 : じゃ、貰いてらっしゃる？</p> <p>参加者6: そう一です。いまさら引き返せないってなった…し、母も小さいころから私も黒い服着せたしなっていう思いがあるらしくて、反対もできずっていうところがあった。</p>

引用 16

引用	語り
引用 16 タイツで学校に行く	参加者8:タイツっていうのが、ズボンだって思ってた時期があって。 (一部略)
	参加者8:タイツやとズボンの形してるから、これは一枚で履くものなんだと思って。
	調査者:もしかして、タイツ一枚で外に出ちゃったり?
	参加者8:行っちゃいましたね。学校行っちゃいましたね。親に帰ってから悲鳴あげられて。 (一部略)
	調査者:何か言われました? 帰ってきてから。
	参加者8:これはね、違うんだよ。これはね、下着、下着みたいなものだからつつつて。分かるでしょ、見て気付きなさいよとかかって。
	調査者:先生にも何も言われず?
	参加者8:生徒からは言われましたけどね。友達から、「え、それってズボンじゃない?」って。「いや、こういうズボンなんだよ」「そうなの?」とかかって。 (一部略)
	参加者8:まあ、その一件があって、どうもこのズボン具合が悪いつつつて、着なくなって、小6ぐらいで徐々に気付き始めて、あれは過ちだったんだあって。

という例もある(引用 16:タイツで学校に行く)。

本人が実際に失敗していない場合にも、他者のよそおいについての噂話が着衣への関心を向けるための重要な要素となることもある。引用 23 で挙げたのは、大学生になってからの語りであるが、彼女は周りの発話を通して友達コミュニティ内での衣服着用のルールを知ることとなった。ルールや本人の失敗が直接的な原因ではなかったとしても、スカートめくりが流行ると恥ずかしい思いをすることが嫌でズボンをはき始める(参加者 8) など、その集団の中で居心地の良くない衣服は選択されなくなる。さらに、参加者 1 が「高そうな細い肩の紐とかの、女の子っぽい(衣服)着ている人には、話しかけづらかった」と語っていたように、選択する衣服のジャンルは対人関係にも影響する。

⑤「政治」：優等感としてのファッション

政治的価値の1つ目として、優等感としてのファッションが挙げられる。遊びとしてのファッションを経験すると、雑誌に載っているようなファッションに関心を持つ子どもも増えてくる。多くの子どもたちにとって重要なのは、衣服そのものではなく、ブランドであることもある。他人との比較において、特定のブランドのロゴマークが入っていることを好む、もしくは、ブランドを持つことに優等感を感じる、購入して

もらった衣服を自慢するといった現象が認められる。子どもたちはブランドで身を包んでいる度合いを競い、相手よりも優位に立とうとする(引用 17:ブランドのマークが入っていると優等感)。なお、これは他者との差異化を測ることが重視される行動であり、基本的にはお互いに真似し合うことはない(引用 18:買った服は見せ合うが真似はしない)。

⑥身体という拘束と衣服選択

政治的価値の2つ目として、身体の問題が挙げられる。たとえ遊びであったとしても、衣服は自己像や身体性の基盤から独立したモノとはなりえない。このころになると、自分の身体を顧みて特定の衣服が選択されたり、されなくなったりという現象が起こり始める。たとえば、参加者 2 は「ゴスロリ(ゴシック・ロリータ)はかわいい子が着るものなので、自分は着ない」と語ったし、参加者 4 は「脚を出すのがいやになった」と語っていた。こうした現象は他者との比較の上に成り立っており、特に制服という揃いの衣服を着る事とその見栄えによって同一性と差異化が起こると考えられる(引用 19:ごめん脚は出せないな)。



## 引用 17 から 18

引用	語り
引用 17	<p>ブランドのマークが入っている と優等感</p> <p>参加者3:他の子はブランドじゃないの着てたりしても、自分はそのキャラクターが(よかった)。ブランドじゃないですか。印、付いてるから。「ちょっといいでしょ」みたいな。「おしゃれでしょ」みたいなもあつたんじゃないかなって思います。          調査者:そういうのが分かりやすい感じやったんかな。          参加者3:ああ、多分そうだと思います。分かりやすいブランド。          調査者:みんなが「いいな」とかっていう反応とかあつた?          参加者3:「あ、それ、ANGEL BLUE でしょ」みたいな。「そっだよ」っていう。          調査者:うん。言われるのとか嬉しい?          参加者3:「おしゃれだね」みたいな感じに。言われるのが嬉しかったです。          (一部略)          調査者:子ども色々あるんだね。子どもたちの中でっていうか、ANGEL BLUEとかmezzo piano を着てるっていうことは。憧れなの?          参加者3:憧れていうか。憧れですね。「持ってないの?」みたいな。持ってなかったら。やっぱ持つるとちょっと、ステータスっていうか。そういう部分も少なからず。          (一部略)          参加者3:「あ、あの子着てるのmezzo piano だ」みたいな。やらしいですね、なんか。</p>
引用 18	<p>買った服は 見せ合うが 真似はしな い</p> <p>調査者:自分がこういうの買ったとかっていうのは。見せ合いっことかして?          参加者3:ああ、そうです。「これ、この間買ってもらったんだ」みたいな。感じて言ってる。          調査者:何かさ、そういうので「いいな」みたいな感じで、真似っことかはする?          参加者3:ああ。羨ましいとか、かわいいとか思うけど。同じの買っちゃったら。真似したとか言われるじゃないですか。それに同じもお揃いもなんか嫌だったの。あんまり真似っこはしなかったです。</p>

## 引用 19

引用	語り
引用 19	<p>ごめん脚は 出せないな</p> <p>調査者:セブンティーンとかさ、ラズベリーとか見だして変わったこととかある?          参加者7:見だして変わったこと。ああーそうですね。モデルの子たちが皆細いんで、ごめん脚は出せないなって、思いました。          (一部略)          参加者7:特にそう感じ始めたのが一、中学入ってからくらいで、皆制服でスカート着るじゃないですか、先輩がいない時スカートあげるとかしてるうちに、その一脚の格差が、あー、あの子足細いみたいな。          (一部略)          調査者:皆が短くしてるから、一緒に短くしたいなっていう気持ちはあつたの?          参加者7:あ、ありました。          調査者:一緒のことがやりたかった?それとも、出してるのがファッションとして好きだった?          参加者7:ファッションとして好きだったのもあるんですけど、若干浮きたくなかったのもあります。          調査者:長かったら浮く感じ、なくらい皆短い?          参加者7:皆、短かった、ですねー。</p>

## ⑦「経済」：養育者同伴の衣服選択

この時期には、養育者から与えられた衣服を着ていた段階から徐々に自分で選ぶように衣服選択行動が変化する。その変化は、着衣を選ぶ行動の偏りから、結果的に、養育者の行動の変化を引き起こす場合もある(引用 20:結果的に衣服を自分で選ぶようになる)。

より一般的な観点から捉えると、衣服を選ぶ過程は、状況論的アプローチ(レイヴ&ウェンガー 1993)で指摘されてきた過程に沿うものである。最初のころは、衣服の選択はすべて養育者にゆだねられる周辺の参加の段階であるが、徐々に選択権が子どもに委譲されていく。その間には、準拠枠が養育者から離れるにしたがつ

て、例えば、養育者が不適切であると考えられるような衣服(着丈の短いズボンやミニスカートなど)を自ら選択し、着用することによって、養育者の許容範囲を超えていくという語りも見受けられる。子どもは、最初のころは家の中で着る衣服を選べるようになり、次に日常的に外で着る服を、そして徐々に広い社会・文化的文脈において服を選ぶ権利が委譲されるようになっていく。

他方で、先に挙げたように、衣服を選ぶ権利の委譲が行われた後でも、養育者の価値観が取り込まれていることもある。これに関しては、尾田他(2003)の研究から、娘世代では外面的おしゃれなほど、母世代では内面的おしゃれな



引用 20

引用	語り
引用20	結果的に衣服を自分で選ぶようになる 調査者：小学校上がったぐらいから、もう自分で服を選んでた感じかな？ 参加者1：家で着るときは自分で選ぶようになってたんで、そのころは、あんまり着たくないの着なくなっちゃって。母親も買ってもし着たくないってなったら困るからみたいな感じで、「着たいものを着なさい」って言って。一緒に選ばせてもらってました。

ほど高く価値づけられるものの、おしゃれ志向及びジェンダー・パーソナリティについては母から娘に継承するということが確認されている。

⑧ 自立的な衣服選択への動き

前述のような選択権の委譲は、子どもの側からの働きかけによって起こることもある。例えば、親の反対を押し切って自分の欲しい衣服を買うことなどである（引用 21：「親に反対されながら短いズボンを買に行く」）。衣服の例ではないが、ファッションの一環として親に注意されるかもしれない思いながらも「ドキドキしながらマニキュアを塗る（参加者 2）」という者もいた。このように試行錯誤しながら子どもは自立的な衣服選択を行うようになっていく。

(3) 社会のなかで自分らしさを保つ為の着衣  
(中学校から高校)

中学校から高校にかけては、衣服がファッションとして捉えられるようになってくる。特に、「政

治」面においてブランドから脱却からの動き、「社会」面においてブランドからの以降がなされ、着衣の自立的選択過程が伺える。ここでは、政治・探求・社会の順にエピソードを記述していく。なお、経済については直接的な言及がないが全体として捉えられたものであるため、記述を省くこととした。

① 「政治」：ブランドからの脱却の動き

中学校になると、以前のままのブランド志向が続くのではなく、別の志向に変化することもある。その変化にも友達や他者など、社会を形成している人々が関わっている。例えば、姉妹や従姉妹のような年上の人や目標となる集団の変化が服飾の嗜好性に変化をもたらすこともある（引用 22：「従姉妹に原宿に連れて行ってもらう」、引用 23：「美大生のイメージに合わせて服を変える」）。ここで、ブランドからの脱却としたのは、以下の 2 つの理由による。第 1 に、2. われわれ意識を支える衣服（小学校から中学校）

引用 21

引用	語り
引用21	親に反対されながら短いズボンを買に行く 参加者 8：親が一、「脚を見せるのは何かよくない」みたいなこと言って、「嫌、うちは、長ズボン飽きたから、見せたいよ。」とかって言いながら、親に言っても買って来てくれないから買に行きみたいな感じで。

経済	⑥ 衣服消費活動の探求		
探求	② 制服によるファッションへの多様な影響		
政治	① ブランドからの脱却の動き		
感覚			
社会	③ 身だしなみとしての衣服ファッション	④ ブランドからの移行	⑤ ファッションを介した他者とのコミュニケーション

図 3. 社会のなかで自分らしさを保つ為の着衣（中学校から高校）

## 引用 22 から 23

引用	語り
引用22	<p>従姉妹に原宿に連れて行ってもらう</p> <p>参加者9:「ラバーズハウス」っていうのと、あと、「コルル」とか、ほんとに皆が、私の世代よりちょっと上のお姉さんとかが着てるのが憧れでちょっと遠いお店に行ったり。私実家が静岡なんですけど、原宿に従姉妹のお姉さんに連れてってもらって。買ってもらうって、すごいほんと憧れが、すごかったです。</p>
引用23	<p>美大生のイメージに合わせて服を変える(高校)</p> <p>参加者10:美大に入ろうと思ったのが高校くらいだったので、けっこう美大生ってなんか、ちょっと変わった服装着ているイメージが自分のなかであって、多分ちょっとでも...真似しようとしたのになっていいます。</p>

の時期の「ブランド」が特定の社会集団としてのドミナントなブランドであったのに対して、ここではより個性化を求めている。第2に、お姉さんへの憧れや美大生のイメージを持つことで、ブランドよりも特定のイメージに近づくための着衣の選択がなされていた。こうした意識は、より主体的で自覚的な着衣の選択を促すことにつながると考えられる。

## ②「探求」：制服によるファッションへの多様な影響

他方で、中学校・高校では、制服の着用が義務づけられていることもある。この場合に、ファッションという意味では制約が与えられることになる。ただし、制服による制約は、「制服なので、服を気にしなくなる(参加者4)」というように衣服の選択をする必要がなくなるという意味で捉えられる場合もあれば、課せられた制約の中で、いかにおしゃれをするかという意味で制約を楽しむように捉えられる場合もある。例えば、引用24は、制約の中でのこだわりを制

服を着用する際の靴下の規定が「白を基調としていること」だったことから、靴下の長さ、たわみ具合、ワンポイントの刺繍などにこだわっていたと研究参加者が語っていた。

## ③「社会」：身だしなみとしてのファッション

年齢が上昇すると、女性は「オシャレ」に興味があるか否かにかかわらず、社会からの要請が身だしなみとしてファッション感覚を身につけるようにと変化することがある。また、養育者のスクヤフォールディングにより、自分で衣服を選択する必要が高まる。ファッション行動の消極的参加者であるメンバーも服を買ったり「やっておかないといざという時に困るだろう(参加者8)」という前提に基づいて化粧の練習をしたりという必要性に迫られる。

## ④ブランドからの移行

この時期には、ブランドものをもつよりも、服を安く購入することがファッション行動を動機づける場合がある。必要な服を安く購入する

## 引用 24

引用	語り
引用24	<p>制約の中でのこだわり</p> <p>参加者2:靴下が、白が指定だったんですけど。一応、裏工作じゃないけど。1年生はここまでしかしちやだめとか、あるじゃないですか。1年生は絶対、丈がこの辺までの靴下しか履いちゃダメみたいなのがあって。だからそれ守ってたんですけど。2年生ぐらいからは。あの時期、ちょっとルーズソックスが流行った時期だったので。ちょっとたるむぐらいのやつをはくのがこだわり。あと、ワンポイントはオーケーだったので。そのワンポイントはかわいいやつ。ちょっとハートだったりとか。星だったりとか。その辺のこだわりですかね。あと、スニーカーも、白を基調としていれば。自由だったのでなんか、まあ、かわいいものを。選ぼうとしてましたね。 (一部略)</p> <p>調査者 : アクセサリーとかにもこだわった? 参加者2: そうですね。なんか、ちっちゃいのが好きで。制服の中にもつけてました。 調査者 : 校則ではオーケーなん? 参加者2: いや。でも、ボタン閉めちゃえば見えないから。</p>

ことが、衣服を買う新たな楽しみとして認識されることもある。

⑤ファッションを介した他者とのコミュニケーション

この時期以降、着衣のオプションとしてファッションの幅が広がる。着衣の範疇を超えるが、例えば社会的関わり of 応用的展開として、コミュニケーションツールとしてファッションアイテムとして化粧やアクセサリが認識され、使用される場合もある。例えば、安いアクセサリを交換して遊ぶ（参加者2）、髪の毛を染める（参加者1）などがそれにあたる。また、高校時代に留学経験がある研究参加者は、敢えてコミュニケーションを促進するために日本人らしい着衣を選択していたとも語っていた（引用25：コミュニケーションのきっかけになる服を選ぶ）

3. 考察

本研究では、女子大学生を対象にインタビューを行い、発達の経緯の中で着衣と個人の関わり方は各々が存在する状況の下で社会的に構成されているものと考え、インタビューでの語りをもとに分析をおこなった。

結果の概要は、図4のように整理される。着衣の変容過程について個人の発達と衣服に対する価値観を掛け合わせて考えた場合、必ずしも衣服はファッションとしてのみ取り込まれているのではないことがわかる。衣服の取り込みに関わる価値観は発達とともに、個人志向的でアニミズム的傾向から社会的、政治的な傾向へと

変容していく。こうした価値観の変遷は、幼稚園時代においては、幼児期から児童期にかけての自我の芽生え、脱中心化や遊びの過程と関連づけて考えることができる。小学校時代には本人の所属集団内部の規範や役割によって着衣が決定され、中学校時代には、社会的価値観から一歩進み、政治的価値観も含めた中での衣服選択が行われるようになる。その間、小学校から中学校にかけて、家族と調査協力者の相互作用において衣服選択の自立過程と捉えられるような権利の委譲がおこる。この期間に調査協力者たちは自分たちで衣服を選択し、購入するという行動を身につけるようになっていくのである。なお、全ての時期区分において空白となっている価値観は、それらの価値観がないことを意味しているのではない。むしろ、個人にとって明確に立ち現れていないということを示しているのである。

本研究の結果からいわゆるファッションとしての着衣という文化が形成されるのは、少なくとも女性に限って言えば、能動的な着衣選択が開始される小学校高学年から中学校にかけてだと考えられる。自己の身体性・社会性・ファッション性が一体となり、個人にとって自己を組織化し、社会に向けて発信するためのファッションが行為として形成されるのである。本研究の研究参加者数は10名と少数であり、また、女性のみに限られている。そのため、調査結果の一般化について限界はあるが、着衣は個人と他者、そして世界の関係性をつくるための接合面として理解することができる。

引用 25

引用	語り
引用25 コミュニケーションのきっかけになる服を選ぶ	<p>参加者9:なんか説明しにくいですがね、でも日本にしかない服とかを買ってって向こうで着ると、店員さんとかが話しかけてくれるんですよ。それどこで買ったの？って。例えば、なんかすごい厚底のショートブーツとか。そういう履いてくと向こうで背が低い人が、ジャパンで買ったんでしょ？みたいな。</p> <p>調査者 :ああ、向こうで売ってないようなアイテムとか、ブランドのもの？</p> <p>参加者9:そうですね、だからなんかもう自分が好きなものっていうより、人に見られて、コミュニケーションのきっかけになるように、っていう感じでした。日本人っていう差別もすごいあるし、服で一置かれるみたいなのを、すごい頑張っていました。</p>

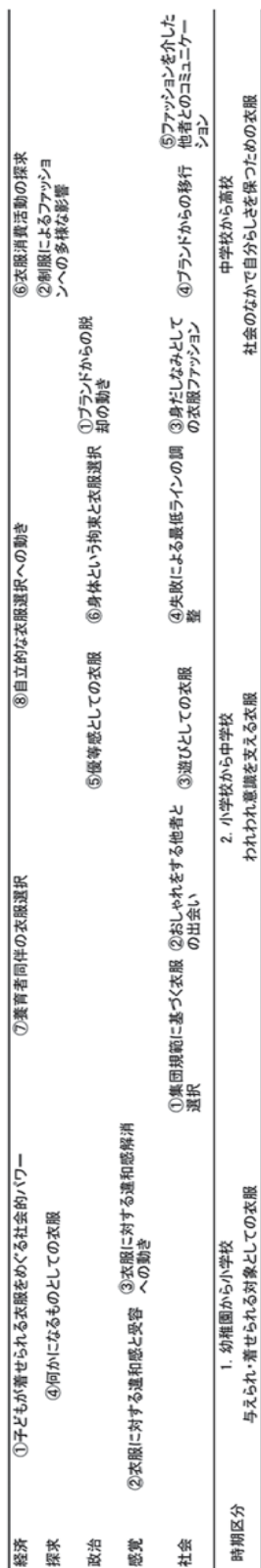


図 4. 発達における着衣の変遷

なお、本研究に一貫する視点として、個人の選択に重きをおいてきた。誰に強制されたのではなく、自分自身の基準において着衣を選択することで、媒介としての衣服-モノが拡張自己の一部となる。即ち、自分自身が選び身をつける過程において自己のイメージに適合している衣服が選ばれ、自己の貴重な所有物として拡張自己をつくることになる。本人がこだわって選んだ服だからこそ、自分の一部になるのである(神山 2011)。それは、よそおいを文化とみなす本論の立場において、着衣が特定の価値を担う(value-laden)行為と捉えられるからである(Valsiner 2007)。

ここでは、女子学生を研究参加者としてインタビューを行ったが、現実社会において個人の着衣を生成し維持するためには、個人の周りにあるリソースと状況を考慮に入れる必要があると考えられる。多くの場合に、リソースと状況を支える社会的構造を作り出すのは、雑誌などのメディア、家族や友人といった他者の存在である。リソースである衣服は物理空間上では、それぞれ単に商品として布置されているにすぎない。しかし、全ての衣服に均質にアクセスができるわけではない。そこには、衣服の記号的性質が影響を与える。年齢にふさわしい服、状況にふさわしい服など、衣服選択の現実的場面にはさまざまな意味での壁や促進/抑制メカニズム、すなわち社会的構造がある。養育者と衣服を買いに行く場合には決して選ばれないタイプの衣服が、友達との遊びとして衣服を買いに行く場合には選択されることがある。個人の好みのような単に内的に志向されるものでも、社会的に好ましい服という単に外的に志向されるものでもなく、衣服選択を支える社会的構造の活動の下支えのもとで着衣の実践が可能になる。

実際に、発達の中で、ある社会的構造 A に巻き込まれている人にとって、服は親に着せられるものであり、別の社会的構造 B に巻き込まれ



ている人には、自分の優位さを示すものであり、社会的構造Cに巻き込まれている人には、保温やマナー以上の何物でもなく、また社会的構造Dに巻き込まれている人には、それ自体がコミュニケーションのツールであった。発達を通して、ある個人は事象、対象、人、そして記号と相互作用をする（Zittoun 2006）。その中で、記号的要素に意味づけがなされ、それが個人にとって変容（transition）となる。内化が個人にとって独自の結果となり、それが個人の文化を形成することとなる（Valsiner 1998）。本研究からは、それぞれの価値と意味を下支えするものを社会的構造として捉えることで、語られた内容は説明されると考えられた。

個人にとって最小限の自分の所有物であり、自分で選択できるものであり、自分のモノとして意味を持つ。より具体的には、園児にとって園の多くのおもちゃは共有のモノかもしれないが、自分の衣服は（幼稚園から家まで連続する）「自分だけのモノ」である。また、着る側も、着て運動する主体として、その肌触りや運動可能性が大きな意味をもつし、ある場面においてある活動をする場合に、衣服が自分のしたいことを妨害するものでは好ましくない。それだけではなく、着衣は社会的なものでもある。人は、鏡や他者の目を通して、その服を着た自らと他者を眺めて比較する客体でもある。そして、他者を参照して適切な着衣行動をさぐるのと同時に、自分の着ている服がその集団における服の基準を構成するという相互刺激も起こりうる。

問題において論じたように、従来の被服心理学の理論では、衣服の持つ機能についてさまざまな説明がなされていた。しかし、そうした理論ではそれらの機能が個々人の中で実際にどのように動的に働いているかについての十分な説明をしてこなかった。それに対して、本研究では他の人から衣服を褒められることによって、本人が嬉しいと感じ、また、他の人の衣服を参

照し、良いと思うことで、自分もそれを取り入れるという一連のメカニズムや、他の人が第三者の衣服の悪口をいうのを聞いたり、自分自身が失敗したりするなどといった日常的な経験のダイナミズムを通して、発達の中で着衣に関するさまざまな社会的構造を示した。

これらは、本研究の成果だといえるだろう。ただし、本研究で取り上げた社会的構造が、人の着衣に関する社会的構造のすべてであるというわけではない。衣服は媒介であり、人は、媒介物を自由に使う生き物である。いずれ今は想像もつかない社会的構造を形成し、そのなかで服を楽しむということもありうる。本研究は装う当事者としての経験を扱ったが、続く研究では、養育者の視点を取り込み、身体発達を含む問題として子どもの着衣の質的な変化がいかに生じているかについて聞きたい。さらに、大学入学後の発達過程において経済的に自立することにより経済的事情が変容した場合に装いがどのように変容するかについてもデータを得た上で、掘り下げた考察を行いたい。

## 引用文献

- 有元典文（2001）社会的達成としての学習．上野直樹（編）シリーズ状況的認知1 状況のインタフェース（状況論的アプローチ）金子書房、84-102.
- Creekmore, A. M. (1966) *Methods of Measuring Clothing Variables*. East Lansing: Michigan Agricultural Experiment Station.
- Drake, M. F., & Ford, I. M. (1979) Adolescent clothing and adjustment. *Home Economic Journal*, 7, 283-291.
- 柏尾眞津子・箱井英寿（2006）大学生における被服行動と時間的志向性との関連性について．*繊維製品消費科学*, 47, 661-670.
- 神山進（2011）被服による消費者の自己拡張：被服は消費者の自己拡張をいかに生み出すか．*繊維消費学会誌*, 52, 92-94.
- レイヴ, J. & ウェンガー, E. (1993) 状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加. 佐伯胖(訳)産業図書.

- (Lave, J. & Wenger, E. (1991) *Situated learning: Legitimate Peripheral Participation*. Cambridge: Cambridge University Press.)
- Morris, D. (1991) マンウォッチング (下) 藤田統 (訳) 小学館ライブラリー. (Morris, D. (1977) *Manwatching*. London: Elsevier Publishing Project.)
- 茂呂雄二・有元典文・青山征彦・伊東 崇・香川秀太・岡部大介 (2012) 状況と活動の心理学: コンセプト・方法・実践. 新曜社.
- 中島純一 (1998) メディアと流行の心理. 金子書房.
- 尾田貴子・橋本幸子・柏尾眞津子・土肥伊都子 (2003) おしゃれの二面性に関する研究—被服・化粧行動, 心理的健康との関連—. 繊維製品消費科学, 44, 700-709.
- 佐藤園・平田美智子・河原浩子・小橋和子・原田省吾 (2009) 中学校家庭科被服学習における子どもの被服関心・自尊感情形成評価への心理測定尺度適用の試み (1): 教科としての目標達成を目指す家庭科評価研究 (第3報). 岡山大学大学院教育学研究科研究抄録, 140, 105-117.
- 菅原健介 + cocoros 研究会 (2010) 下着の社会心理学: 洋服の下のファッション感覚. 朝日新書.
- 高木麻未 (2010) 友人とのつきあい方と被服行動の関連: 被服が友人関係形成に及ぼす影響の探索的検討. 繊維製品消費科学, 51, 129-134.
- 高木修 (2010) 被服の社会心理学的研究の検証. 繊維製品消費科学, 51, 110-112.
- Solomon, M.G., & Rabolt, N. J. (2008) *Consumer Behavior in Fashion*. New Jersey: Prentice Hall.
- Stone, C. A., & Wertsch, J. V. (1984) A social interactional analysis of learning disabilities remediation. *Journal of Learning Disabilities*, 17, 194-199.
- Valsiner, J. (1998) *The Guided Mind: A Sociogenetic Approach to Personality*. Cambridge: Harvard University Press.
- Valsiner, J. (2007) *Culture in Minds and Societies: Foundations of Cultural Psychology*. India: Sage Publications.
- Valsiner, J. (2014) *An Invitation to Cultural Psychology*. London: Sage Publications.
- Zittoun, T. (2006) *Transitions: Development through Symbolic Resources*. Greenwich: Information Age Publishing.

(受稿日: 2014. 12. 1)

(受理日: 2015. 5. 21)

Original Article

# The Meaning of Transitional Acts in Selecting and Wearing Clothing: Research through Interviews with Female University Students

KIDO Ayae <sup>1)</sup>, ARAKAWA Ayumu <sup>2)</sup>, SUZUKI Tomohiro <sup>3)</sup> and  
YAZAWA Mikako <sup>4)</sup>

(Ritsumeikan Global Innovation Research Organization, Ritsumeikan University<sup>1)</sup>,

College of Art and Design, Musashino Art University<sup>2)</sup>,

The School of Child Psychology, Tokyo Future University<sup>3)</sup>,

Faculty of Human Sciences, Correspondence Division, Musashino University <sup>4)</sup>)

---

This study explored how women select their clothing in what it means in their developmental process. Ten female university students participated in the researcher's investigative interview. The purpose was to clarify the meaning of transitional acts in selecting and wearing clothing from their childhood to adolescence. The analysis focused on a complete picture of people who wear clothes and the socio-cultural context surrounding them, based on the aspects of creation, succession, and alternation of clothing. These results indicate that the qualitative turn of clothing is related to their daily experiences and how they systematize those experiences.

**Key Words** : Clothing psychology, Cultural psychology, semi-structured interview

*RITSUMEIKAN JOURNAL OF HUMAN SCIENCES, No.32, 85-103, 2015.*

---